

ほほえみ



←人権教育係の
ホームページで
もっと詳しく

第 60 号(令和 2 年 12 月)
発行：小山市教育委員会

「令和元年度 栃木県人権に関する作文」最優秀賞受賞作品を紹介します。



「心の垣根を越えて」

小山市立大谷東小学校 保護者 矢島 早苗



イギリスの作曲家の中にアルバート・ケテルビーという人がいたのはご存じでしょうか。一番よく知られているのは「ペルシャの市場にて」という作品かもしれません。私が特に好きなのは「心の奥深く」という作品です。五分あまりの小品ですが、賛美歌のような美しさと力強い旋律で、初めて CD を聴いたときは心が震えました。そして、一体どんな背景で作られた曲なのだろうと知りたくなり、調べてみることにしたのです。

ケテルビーは 1875 年にイングランドで生まれ、音楽の才能を開花させ、イギリスで最初の億万長者作曲家になった人だそうです。「心の奥深く」は 1924 年、ケテルビー 49 歳のときの作品で、この曲にはユダヤ教の礼拝の際に歌われるフレーズが引用されていることが分かりました。彼は 10 代の頃、教会のオルガニストを務めていたのですが、なぜユダヤ教の音楽に影響を受けたのだろうか、と更に調べていくと、ケテルビーの妻がユダヤ人女優であったことが分かり、少なからずその影響が想像されました。当時のイギリスではユダヤ人や女優に対する偏見が強く、彼女との結婚のためにケテルビーは家族から断絶されてしまったのだそうです。

日本に暮らしていると、ユダヤ人がなぜ差別や迫害に遭わなければならなかったのか、その歴史に触れる機会が少ないため、理解し難く感じました。迫害の原点はイエス・キリストへの裏切りにあるようなのですが、なぜそれが 2 千年以上にも渡るほど根深くなってしまったのでしょうか。

夫の祖国イランにも少数ですがユダヤ人が暮らしているので、夫にイランではどうなのか尋ねてみました。ユダヤ人といってもイランで何世紀にも渡って生活している人々です。彼らはイランの公用語ペルシャ語を話し、生活もイランの様式なので、信仰が異なるイラン人と捉えられているそうです。イランにおけるユダヤ信仰の人々の歴史は古く、紀元前 6 世紀までさかのぼることが分かりました。ペルシャ帝国の興亡や王の交代などによって、弾圧されたときもあったようですが、母親がユダヤ人という王の出現によって信教の自由が認められ、ヨーロッパで迫害を受けていたユダヤ人よりも人として生きる権利が認められていたそうです。また、このほかにもイスラム教のモスクと同じ形をしたドームの頂上部分に、小さな十字架が掲げら

れているモスクもあるのです。これはキリスト教徒のための建物です。

このような共存の考え方、寛容な心こそが今まさに世界で必要な意識なのではないかと感じています。人は理解し難いものには恐れや嫌悪を抱きやすい弱い心をもっています。一度悪いことが起ると、その原因を特定の人たちに押し付けてしまいがちです。しかし、自分に理解できないことが起きても、その人や民族を否定することが正しい行いなのでしょうか。あるいは自分たちよりも生活水準が低いと一方的に見なし、見下したり搾取したりすることで互いに安らぎを得られるのでしょうか。

私は以前、長男が生まれた際にイランの親戚からたくさんのお祝いの品を頂きました。正直なところ、玩具や洋服は日本の安価なものよりも品質の劣るものがあり、困惑してしまいました。もちろん、質の良いものもありましたが、それが彼らにとってどれほど高価なものであるのか考えが及ばずにいたのです。真心からくださったものに対して私は浅はかでした。何よりも、夫の母や妹たちが手編みで作ってくれた毛糸のベビー服や毛糸の帽子、靴などには心から深く感激しました。これがペルシャ絨毯^{じゅうたん}の国、編み物の国だと気付かされたのです。一目一目を編みながら、当時まだ見ぬ孫や甥^{おい}の姿を想像し語り合っていたであろうイランの家族の深い愛情を思うと、私は恥じ入るしかありません。

この経験から文化の異なるもの同士が分かり合うためには、相手の立場を尊重し、その国の芸術や歴史を知ること、更には子供たちにそれを伝え、曇りのない心に根拠のない優越感や嫌悪感などを植え付けないようにすることの大切さを強く覚えます。

ケテルビーがユダヤ教の音楽を作品に取り入れた側面には、もしかすると心の垣根を取り払い、宗教や民族を越えた一人の人間としての良さを認め合える未来であるよう、願いを込めていたのかもしれません。

イスラム教には捧げ物祭りという宗教的な祭りが 있습니다。その起源は、神へいけにえにした羊の肉を家族や近所の人たち、恵まれない人たちと分かち合うことにあるそうです。境遇の異なる者同士が平和な食卓を囲むことで緊張がほどけ、互いに尊重し、許し合える仲になれるかもしれないのです。ここに寛容になるための可能性を覚えます。その理解への道筋が開かれた社会であるように願ってやみません。

※「栃木県教育委員会 人権に関する文集 明日へのびる 第39集 掲載作品」

違いを受け入れ、互いに尊重し合う

2019 年ラグビーワールドカップ日本大会が大きな盛り上がりを見せましたが、成功に終わった要因の一つに、ラグビーというスポーツのもつ「多様性を受け入れる寛容さ」があると言われています。

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会においても基本コンセプトのひとつに「多様性と調和」が挙げられています。スポーツ観戦の機会が減っていますが、応援したい選手の出身国や観戦したい競技の発祥国などの文化や歴史を調べ、ご家庭で話題にしてみてもいいのではないでしょうか。



今回の『ほほえみ』はいかがでしたか？皆様のご感想・ご意見等を、ぜひお聞かせください。e-mail: d-gakusyu@city.oyama.tochigi.jp